文芸特別企画展

『岩波其残展』

会　期　平成二一年九月五日（土）～
平成二一年一二月二〇日（日）

主催・会場　茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館

凡　例

本書は企画展に併せて作成した図録に、展示した作品を加え、再編集したものです。
作品に付した番号は、展示目録の番号にあわせてあります。

岩波其残展に寄せて

岩波其残は幕末から明治前半にかけて諏訪俳壇の中心として活躍した大物俳人でした。のみならず日本画、俳画、楽焼、篆刻、生花、茶道など、多芸を誇るマルチタレントでした。長崎遊行中には当時最新鋭の写真術を学び、高島城を撮影した写真を残しています。

其残の生きた時代は幕藩体制の歪みが拡大し、やがて崩壊して明治の新時代を迎えた大変動の時代でした。前近代と近代という全く異なる時代を生きた典型であり、或る面では藤村の「夜明け前」の主人公青山半蔵に似たところもあります。明治維新以降の西洋化の中で次第に時流に取り残されながら己の道を貫き通した80年の生涯でした。儒教全盛時代に孔孟の道に己を律することなく、他人の囲いものであった美智（号雨篁）との恋を成就すべく前後10年余の全国行脚を果たし、生涯連れ添うなど近代に通ずる人間的な生き方の先駆者でもありました。

平成6年、没後100年を記念して遺墨展が開催されましたが、以後其残の作品を公開する催しも絶えて今日を迎えました。其残研究家の山田敦夫先生もご高齢になられた今、先生蒐集になる其残の作品を中心に改めて其残の真髄を玩味してください。

平成二一年九月五日

茅野市八ヶ岳総合博物館
茅野市八ヶ嶽岳麓文芸館　館長　茅野靖夫

八ヶ嶽岳麓文芸館企画展

岩波其残展

平成21年9月5日(土)～12月20日(日)

2　岩波其残像　追悼集『花の山』より

1　軸「節分」

岩波其残の生涯

其残研究家　山田敦夫

岩波其残は文化十二年（一八一五年）、上諏訪中町の旅篭大林屋山田両蔵の長男として生まれた。山田家は文出村(現諏訪市文出)の農家で、同十一年に兼業商人宿を始めたばかりだった。

其残は幼名を鐵蔵、長じて鐵三（かねみつ）と称した。鐵蔵は幼少からひ弱であったらしく、家業や農業にはあまり精が出なかった。心学などの心得のあった母とみの影響でか、文筆や芸事に親しみ十六歳ごろ、近所に住む高島藩士で俳人の久保島若人（一七六三―一八五一）の門に入り俳諧を始めた。其残の初号は『蓼洲』と言った。

〈啼く蝉に流れかおるや松の風　蓼洲〉鐵蔵は十九歳で家督を相続したが、芸事ばかりで家業には精が出す、自ら父母に頼んで二十八歳の時、弟由蔵（良蔵）を順養子とし家督を譲り、旅篭の裏庭に芒の東屋を造って住み、芸事に励んだ。

〈風さそふのみや芒の苅残し　其残〉

これは後年若いころを振り返っての句である。

弘化三年に師・若人の勧めで、初めての著書「洲羽百家集」を出版。百人の画像に各人の句を添えたものである。雅号はこのすこし前から『天晋』と改号した。

〈手入れせな山吹の花横になる　天晋〉

これより前、東国一の眼科医竹内新八が裏町に住み楽焼が好きだったので、鐵蔵が楽焼のことで新八宅に出入りするうち、新八の愛人美智と鐵蔵が恋仲となり、百家集を出版した後の嘉永元年（一八四八年）八月、二人は騒ぎをかわすために連れだって旅に出た。美智の生国の尾張を経て伊豆回りで相模、そして下野・常陸・下総などに数ヶ月の長期滞在をしながら、北は奥州松島金華山、近くは日光、南は房総の名所、旧跡を訪ねその風景を色墨で画帳に納めた。

約八年後の安政二年（一八五五年）暮れ、一時帰郷したが、諏訪での受け入れ態勢が整わず、翌三年二月に二人は再び旅に出た。かっての知れた下野を起点に上州路、信越・加賀、近江・京都、四国・讃岐・周防、九州・長崎、熊本・阿蘇を回って安政四年暮れ近くに帰郷し、長い旅を終えた。

旅で記した「四国名旧真写」など色墨で着色された画帳が三冊残されている。これらの写生は其残の絵の基礎がしっかりしていることを示し、見事なものである。旅の間は風餐露宿など苦難もあったことが想像されるが、記されたものはまったくなく、絵画（測量図、歴史画）、楽焼の技楽器の奏法を教えるなど、芸が身を助けたものと思われる。

二度目の帰郷の際は、母とみの実家の岩波家が絶えていたので、鐵三夫妻が岩波姓を名乗って再興することにし、甲州街道沿いの上諏訪清水町六軒に居を構え、小さい紙屋を営んでいくことになった。俳号も『天晋』から『再庵』と改めた。

商いはほとんど美智（雨篁）に任せ、其残は連日のように各地の句会に足を運び、諏訪の十年間の空白を埋るのに努めた。中央の関為山や橘田春湖、京都の芭蕉堂公成や良大との交流も始まった。文久元年には為山の勧めもあり、最後の『雪散屋其残』と改めた。

同三年には師・若人の十三回忌に当たり、それまで師・若人の追悼集冊のないのを嘆き、全国の著名俳家に呼び掛け句を集め、立派な追善集「測駄叟未（そだゆみ）集」を刊行した。

〈ひとに句を貰うて今日の手向かな　其残〉

この集冊の評価で其残は、諏訪俳壇の中心的存在になった―といわれている。

明治改元の前後には歳時記「探題早合点」や花岡梅休、藤森省我との三吟集「水せせり」など三集を次々と刊行。元治元年には和田嶺合戦に従軍し「合戦図」をものにしている。明治五年から十年ごろは、地租改正の耕地図などを書くことが多かったらしく、岡谷鮎沢や上伊中川村小平などに耕地図が残る。

俳諧刊行物はこの時期見当たらないが、明治十三年には「蓮月千句集」十四年に門弟楓山、其井を促し「まにまに集」、十五年には五味永際、小沢半堂を促し「開化集」、十七年には三色刷りの木版での「色鳥集」と半堂、土橋久七の編、其残画の「諏訪土産」

を出版した。十七年末から十八年夏までは妻雨篁とともに北信越を訪ね、越後の村上から三国峠越えの旅行をし、「越後巡り」の紀行文を残している。

妻美智は旅の翌年、十九年六月六十三歳でふとした病がもとで逝去した。

〈長い留守預けられけり独蚊帳（ひとりがや）　其残〉

この悲しみを癒すためにと、下諏訪宿扇屋に嫁いでいた妹のりょうから湯治に誘われ、横町の二階に仮住まいしたが、俳諧の友の結びつきは頼もしく、其残は小口金桃の家（紫庭庵）に入り浸り、金桃に俳画を指導したほか、もっとも筆力豊かな作品のきごう活動などもできて、充実した日々を過ごした。足かけ四年も滞在したことになる。

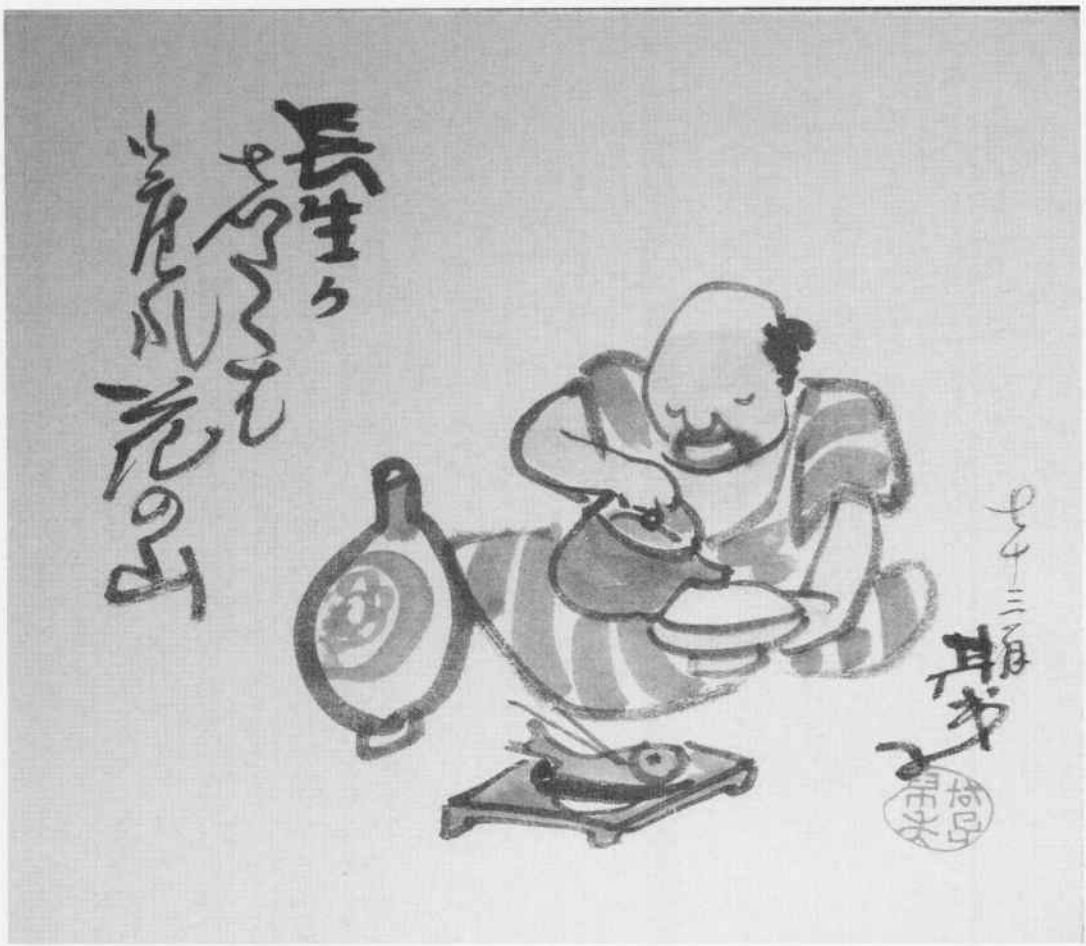
其残は諏訪俳壇の人々に呼び掛け、明治十三年には芭蕉碑「花に遊ぶ虻なくらひそ友雀」を、また二十二年地蔵寺境内に曽良碑「こゝろよせ下駄の響きも萩の露」を建立。諏訪俳壇がこの二人の俳諧の先哲を仲立ちとして、栄えていくことを期待した言葉を残している。

〈涼しさや思った用の足りて後　其残〉

曽良碑建立記念刷り物の句である。

明治二十四年、門人武居層氷の力で其残の絵となる三色刷りの石版の「折花集」が刊行されたのに続き、最後の仕事は芭蕉二百回忌を記念した追善集「草の餅」を刊行することであった。

そして、二十七年四月四日、芭蕉二百周年の年に逝った其残は、数え年八十歳であった。刊行が果たせずに残ったものに、絵入の季寄集「満月集」と、自家句集「もの好集」が家に遺された。



長生が
したくば
ござれ花の山

3　色紙

俳諧の歴史

室町時代末期（一五五〇年頃）―俳諧の形成期

山崎宗鑑編の『新撰犬筑波集』により俳諧連歌より独自のジャンルとして認められる。俳諧は滑稽を意味する連歌用語であり、連句と発句があった。現在俳句と呼ばれるものは連句の第一句である発句に当たる。

山崎宗鑑（生没年諸説あり不明）

手をついて歌申し上ぐる蛙かな

すずしさや水に柳のかげ法師

荒木田守武（一四七三―一五四九）

元朝や神代のことも思はるる

飛梅やかろがろしくも神の春

江戸時代初期（一六五〇年頃）―俳諧成長期

・貞門派―知的な言語遊戯が特徴であり、故事や古典の通俗化と用語拡充に尽力し、俳諧の庶民的性格を助長させた。

松永貞徳（一五七一―一六五三）

花よりも団子やありて帰る雁

門前に市も立花の盛り哉

北村季吟（一六二四―一七〇五）

一僕とぼくぼくありく花見哉

腰をふる門の柳やかぶきもの

・談林派―貞門の平板煩瑣を打破し、俳諧を庶民、特に都市の新興階級に開放した。俗語の多用や奔放で自由な発想を特徴としたが詩としての内省には欠けるものがあった。

西山宗因（一六〇五―一六八二）

さればここに談林の木あり梅の花

ほととぎすいかに鬼神もたしかにきけ

内藤風虎（一六一九―一六八二）　諏訪闡幽の伯父。

春の野や今幾日あらば薪の能

元禄期（一七〇〇年頃まで）

芭蕉により俳諧が文芸として完成される以前にも独自の句風を発揮した俳人たちがいる。

小西来山（一六五四―一七一六）

白魚やさながらうごく水の色

行水も日まぜになりぬ虫の声

池西言水（一六五〇―一七二二）

菜の花や淀も桂もわすれ水

凩の果はありけり海の音

上島鬼貫（一六六一―一七三八）

草麦や雲雀があがるあれ下がる

行水の捨てどころなし虫の声

山口素堂（一六四二―一七一六）

目には青葉山ほととぎすはつがつを

あはれさや時雨るる頃の山家集

・蕉風―松尾芭蕉により中世の文芸理念である風雅を導入し、「寂び」の世界を追求することで詩としての俳諧が完成した。それらの作品は連句と発句からなるが連句が重要視された。『芭蕉七部集』などに収載されている。

松尾芭蕉（一六四四―一六九四）

春なれや名もなき山の薄霞

荒海や佐渡によこたふ天の河

干鮭も空也の痩も寒の内

秋ちかき心の寄るや四畳半

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

宝井其角（一六六一―一七〇七）

鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春

からびたる三井の仁王や冬木立

服部嵐雪（一六五四―一七〇七）

ふとん着て寝たる姿や東山

梅一輪一りんほどのあたたかさ

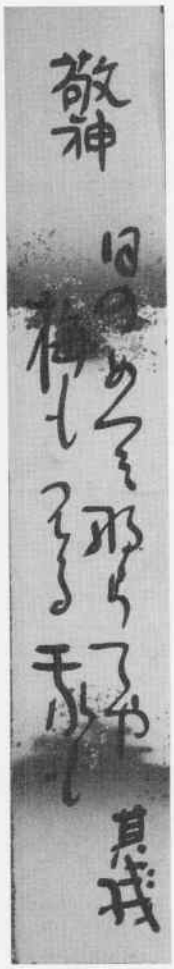
向井去来（一六五一―一七〇四）

うごくとも見えで畑うつ男かな

鳶の羽もかひつくろひぬ初しぐれ

森川許六（一六五八―一七一五）

菜の花の中に城あり郡山
大髭に剃刀の飛ぶ寒さ哉
河合曽良（一六四九―一七一〇）
夜もすがら秋風きくやうらの山
なつかしや奈良の隣りの一時雨
享保期（一七二〇年前後）―俳諧の大衆化
水間沾徳（一六六二―一七二六）
蚊の声のしらむに寂し軒の雨
中川乙由（一六七五―一七三九）
紫陽花におもたき朝日夕日哉
天明期（一七八〇年前後）―蕉風復帰俳諧中興
大島蓼太（一七一八―一七八七）
世の中は三日見ぬ間に桜かな
更くる夜や炭もて炭をくだく音
炭太祇（一七〇九―一七七一）
行く秋や抱けば身に添ふ膝頭
耕すやむかし右京の土の艶
与謝蕪村（一七一六―一七八三）
遅き日のつもりて遠きむかしかな
菜の花や月は東に日は西に
涼しさや鐘を離るる鐘の声
愁ひつつ岡にのぼれば花いばら
こがらしや何に世わたる家五軒
化政期（一八〇〇―一八三〇年頃）―芭蕉の偶像化、俳諧の趣味化、通俗化
井上士朗（一七四二―一八一二）
菜の花に大名うねる麓かな
藤森素檗（一七五八―一八二一）
年どしに桜すくなき故郷かな
夏目成美（一七四九―一八一六）
撫子のふしぶしにさすゆふ日かな
小林一茶（一七六三―一八二七）
三文が霞見にけり遠眼鏡
雪とけて村一ぱいの子ども哉
古郷やよるも障るも茨の花
涼風の曲りくねって来たりけり
うつくしや障子の穴の天の川
天保期（一八四〇年前後）―俳諧の月並化、堕落化
田川鳳朗（一七六二―一八四五）
長閑さにおさへ歩行や膝の皿
桜井梅室（一七六九―一八五二）
名月や草木に劣る人のかげ



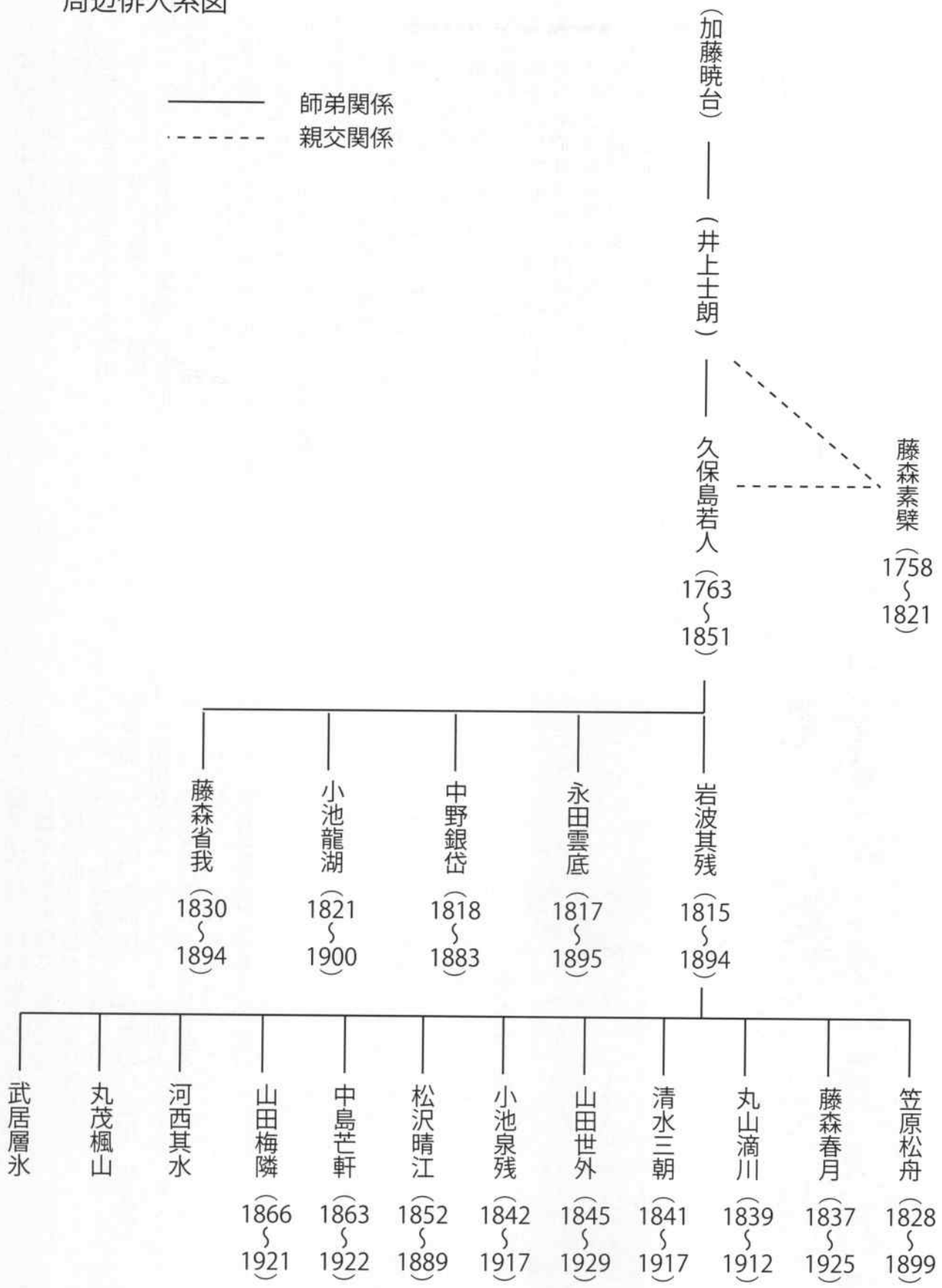
4　短冊

日のめぐみならでや
梅も見る我も

5　短冊

留すのうち守らせ
給へ南瓜棚

周辺俳人系図


師弟関係
親交関係
（加藤暁台）
（井上士朗）
久保島若人
（1763〜1851）
藤森素檗
（1758〜1821）
藤森省我
（1830〜1894）
小池龍湖
（1821〜1900）
中野銀岱
（1818〜1883）
永田雲底
（1817〜1895）
岩波其残
（1815〜1894）
武居層氷
丸茂楓山
河西其水
山田梅隣
（1866〜1921）
中島芒軒
（1863〜1922）
松沢晴江
（1852〜1889）
小池泉残
（1842〜1917）
山田世外
（1845〜1929）
清水三朝
（1841〜1917）
丸山滴川
（1839〜1912）
藤森春月
（1837〜1925）
笠原松舟
（1828〜1899）

其残の俳諧の師匠

久保島若人

（一七六三―一八五一）

本名権平、通称久左衛門。七十石二人扶持の高島藩士。高島藩は四代藩主忠虎（号蘭幽）が伯父内藤風虎や従兄露沾の影響で俳諧をたしなみ、のち嵐雪・其角について蕉風を学んだ。彼のもとに家臣が集い、諏訪の俳諧の種を蒔いた人として記憶に残っている。

そうした流れを汲んだ若人は名古屋の井上士朗に師事したが、士朗の師加藤暁台や暁台の弟子で上諏訪の油商で「俳関」と称せられた藤森素檗とも親交があった。素檗や河合正阿（矢ヶ崎の人）が没した後の化政期（一八〇四―一八三〇）には諏訪俳壇の中心となり、信州各地の俳人とも交流し、小林一茶とも交友があった。

門下には岩波其残、中野銀岱、藤森省我などがおり、編著に『鶴芝』『深川帖』『素檗発句集』『花膾』『昔蓑』らがある。若人への追悼集として『測駄叟未集』（岩波其残編、文久三年）がある。

箒取る手に陽炎の匂ひかな
はつ空や先真向に不二の山
白鷺の居直りもせず薄氷
古里の文とどきけり初袷
地に落ちて雨の螢の哀れなり
旅籠屋の飯の白さよ麦の秋
神代から尽きぬ拍子や里神楽
炭つぐも淋しき折の一仕事
天の川枯野になれば音もせず
松原をぬけて出でたる冬の山

往還も支道もある氷かな

俳画

俳画という言葉は渡辺華山が模写集録に名付けた『俳画譜』によるという。

絵画の系統として本格的、正統的なものに対し鳥羽僧上の「鳥獣戯画」に代表されるような草画や戯画の流れがあった。それを庶民の文芸として近世以降盛んとなった俳諧が結びついたのが俳画であり、与謝蕪村によって完成されたといわれている。蕪村はまだ俳画とは呼ばず、「発句の趣画（おもむきえ）」「俳諧ものの草画」などと呼んでいた。

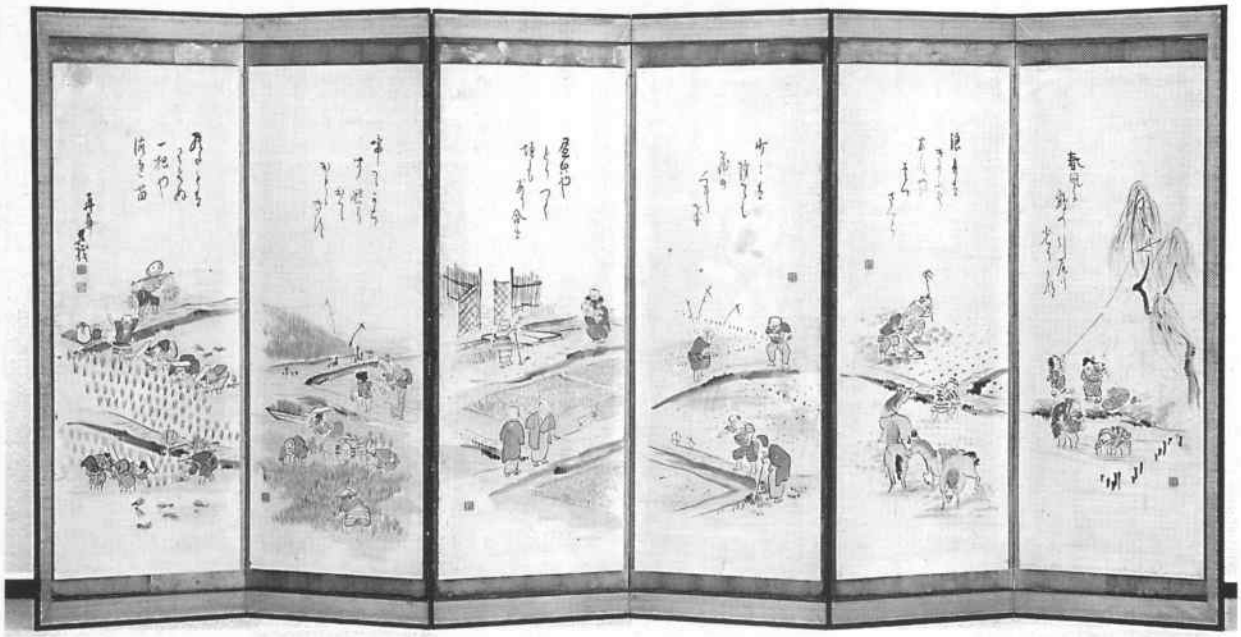
俳画たる条件は賛として必ず句が記されていることであり、連句の付合いと同じで絵と句の微妙な付合いが大切なものとされた。絵は極度に省略された筆致が要求され、表現された世界は品位と飄逸をもって至上とした。

蕪村以後の俳画の名手としては松村月渓（一七六二―一八一一）紀梅亭（一七三四―一八一〇）らが居る。

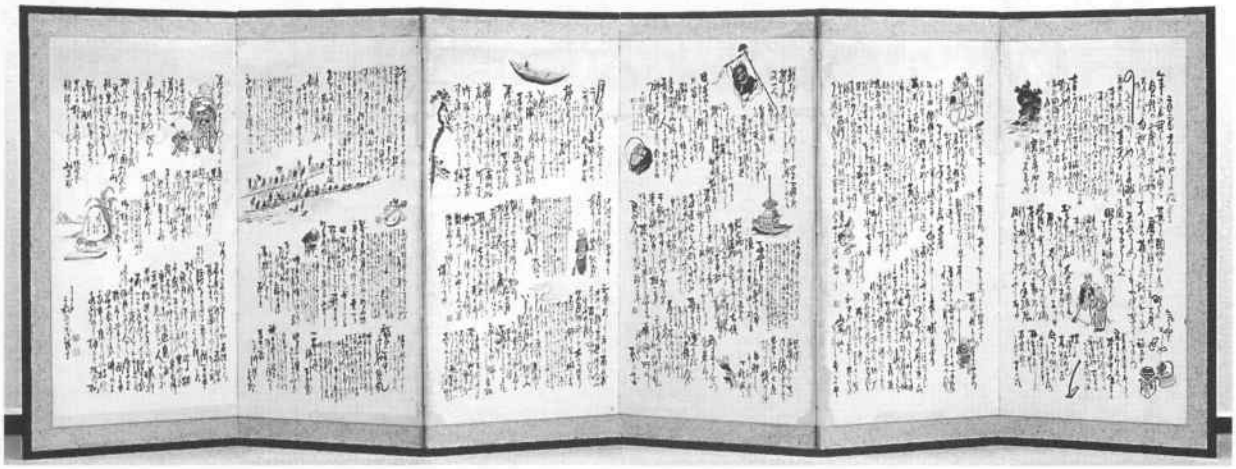
諏訪においても藤森素檗の俳画は全国的に高く評価されており、さらに時代を下って幕末から明治にかけての岩波其残は素檗に匹敵するものであった。

其残は四条派の絵画を若くして学んだがあきたらず、蕪村をはじめとする古今の俳画を研究して独自の俳画を描いた。様々な世界が描かれているがその最も優れているのは庶民の姿をユーモラスに、素朴に描いている点にあろう。飄逸味という俳画の本質を最も良く表している。

6　屏風「米作一年」上・下巻



7　屏風「風物誌」



捨てたとは
　見えぬ
一把や
流れ苗

運ぶのみ
　もどらぬ
ものや
　稲の波

夜げしきの
　はじめ
見よとや
　三日の月

6 「米作一年」 部分

人並に
袷着たれば
嘘かな

2 『花の山』より

10 軸「安宅の関」

9 軸「百福図」

8 軸「職業図」

ない風も
うける
ものかは
落椿

重宝なものは口なり
鬼は外
豆うちや鬼の為には
人が鬼

稼にもはり合の
ある暑さかな
雨乞やある手から漏る
水のさた
そこへ来て居るや
たらいに夏の月

11　軸「農業図」

五月雨も
　はるるか
雲のもどり
　来る

12　軸「神の心」

名月や
　神の心はあの通り

13　軸「もの好曼荼羅」3

月の入あとに
　露けし二つ星
立琴に虫の
　音を聞今宵哉
　　他

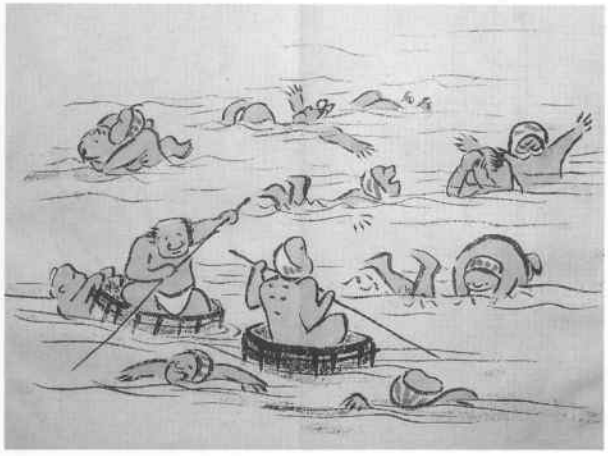
14　冊子 其残十二ヶ月画手本

四月　花祭り

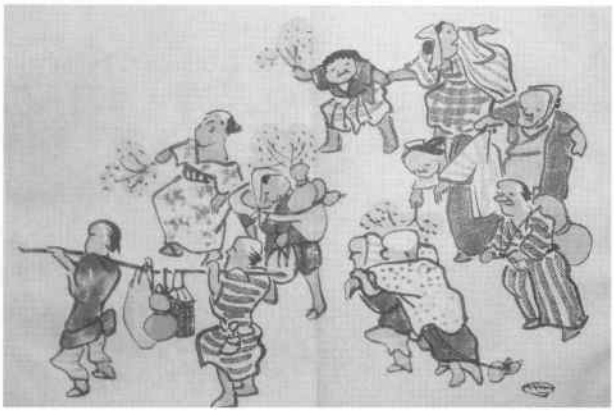
一月　正月

五月　端午の節句

二月　灸



六月　水遊び



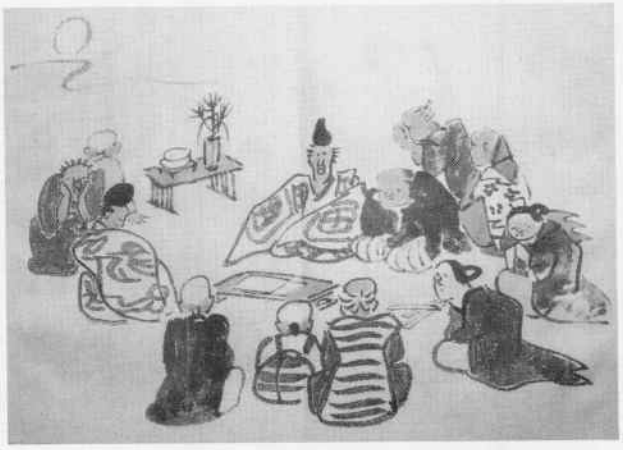
三月　お花見

十二ヶ月は旧暦　新暦より一月ないし一月半遅い

十月　恵比須講

七月　盆踊り

十一月　湯立て



八月　月見

十二月　追儺

九月　重陽

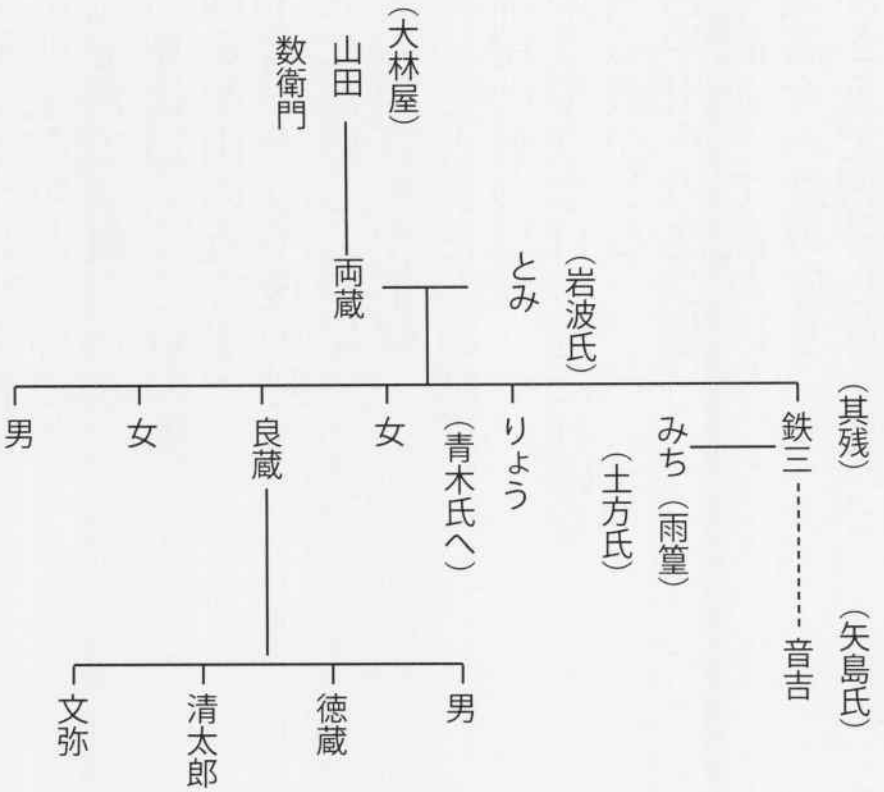
武居幸重編『其残十二ヶ月画手本』より転載

岩波其残略年譜

○一八一五（文化一二）年　一歳（数え齢）
　五月三日　上諏訪中町の旅館（商人宿）兼質屋を営む大林屋にて出生。大林屋は前年開業。山田両蔵-とみの長男。山田家は文出村（現諏訪市豊田文出）の豪農。大林屋は後年質草と生糸で失敗し店をたたんで文出村に帰った。幼名は鉄三（鉄蔵）と称す。
○一八三〇（天保元）年　一六歳
　俳諧を久保島若人（高島藩士）に師事して学ぶ。蓼洲と号す。翌年には天晋とも号した。
○一八三三（天保四）年　一九歳
　山田家の家督を継ぐも農業を好まず芸術に心を寄せ俳諧の他四条派系の絵画や蕪村・日渓の俳画に私淑する。また楽焼を松野由助に学び篆刻の修業にも励む。其残は長崎漫遊後写真を初めて諏訪に持ち帰るなど多芸の人であった。
　後年俳人小平雪人は「其残の持っている芸術の第一に位するのは楽焼で第二には絵画、第三が俳諧である」と評している。
○一八四二（天保一三）年　二八歳
　弟の由蔵（良蔵）を順養子として家督を譲る。家裏の畑に芒屋を建て「雪散屋」と称す。芭蕉の「雪ちるや穂屋の芒の刈残し」にちなむ名称という。
○一八四五（弘化二）年　三一歳
　東国一の眼科医竹内新八（俳号黙庵）に楽焼のことで出入りするうち、その妾の土方みち（尾張藩士松井源三郎の娘、俳号雨篁）と恋仲となる。
○一八四六（弘化三）年　三二歳
　若人門の句友一角と富士登山。
○一八四七（弘化四）年　三三歳
　『洲羽百花集』（諏訪の俳人百人の句と肖像を描いたもの）を著わす。其残最初の著書である。
○一八四八（嘉永元）年　三四歳
　みちと共に出奔、諸国行脚の数年が始まる。
嘉永元年　駿河・伊豆・相模
　〃二年　下野・常陸
　〃三～五年　奥州各地
　〃六年　常陸・下野
○一八五五（安政二年）　四一歳
　諏訪に戻るが二人を受け容れる態勢が整っていず苦慮する。
○一八五六（安政三）年　四二歳
　五月夫婦で九州を目指し行脚の途につく。越後→近江→大阪←金毘羅←厳島←太宰府←長崎
○一八五七（安政四）年　四三歳
　長崎で写真術を学ぶ。熊本←中国筋←京都←奈良←伊勢←東海道筋→諏訪へ帰郷。『回国名所真景図』など画帳三冊ができる。
○一八五八（安政五）年　四四歳
　母とみの実家が絶えていたため岩波家を継ぎ居を上諏訪清水町六軒に定め紙屋を営む。屋号を「畳屋」から「みどり屋」と改め商いは妻みちに任せ再庵と号し其残の号を初めて用いる。
○一八六一（文久元）年　四七歳
　雪散屋其残と号す。
○一八六三（文久三）年　四九歳
　師の久保島若人一三回忌追善集『測駄叟未集』を刊行。
○一八六四（元治元）年　五〇歳
　一一月二日天狗党と高島・松本藩の合戦を『和田嶺合戦図』として現地で描く。
○一八六八（明治元）年　五四歳
　懐中型歳時記『俳諧探題早合点』を著す。信州俳人番付『信陽俳家為交』に最上段の位置を占めるなど信州を代表する俳人となる。
○一八六九（明治二）年　五五歳
　花岡梅休・藤森省我・岩波其残の三吟集『水せせり』を刊行。高島城を撮影する。
○一八七二（明治五）年　五八歳
　『俳諧百囀』を著す。この頃地租改正に合わせ各地の耕地図を

描く。
○一八七四（明治七）年　六〇歳
諏訪大社の神官となる。
○一八七五（明治八）年　六一歳
大衆の教化を計るために設けた教林盟社の社友となり、その分社「敬真盟社」を設立。
○一八七七（明治一〇）年　六三歳
教職につき上野新田（現諏訪市豊田上野）で教える。
○一八八〇（明治一三）年　六六歳
高島公園に芭蕉句碑建立。俳諧雑誌『連月千句集』を刊行。この年四冊のみで終わる。
○一八八一（明治一四）年　六七歳
共著・共編『まにまに集』『開花集』『色鳥集』を刊行。
○一八八四（明治一七）年　七〇歳
暮れに越後への旅に夫婦で出発。
○一八八五（明治一八）年　七一歳
善光寺・一茶の墓・越後各地・上州を巡り帰郷。
○一八八六（明治一九）年　七二歳
妻雨篁死去（六二歳）。妹の嫁ぎ先下諏訪の元木屋の二階に仮住まいし、足かけ四年に及ぶ。
○一八八七（明治二〇）年　七三歳
地蔵寺に曽良の碑を建立。
○一八九一（明治二四）年　七七歳
門人武井層氷により『折花集』（其残の書と絵による俳諧師像）を出版。
○一八九三（明治二六）年　七九歳
芭蕉翁二百年祭りを高島公園で催し追善集『草の餅』を刊行。
○一八九四（明治二七）年　八〇歳
四月四日死去、地蔵寺に葬られる。

其残累系図



其残句抄

明けかかる春や散る雲すはる雲
初東風や小田原吹いて箱根越す
四方拝すませられしか山かづら
長生きの支度くばござれ花の山
梅が香や客見送りて閉める木戸
太箸や物にたくまぬ削り肌
夜は的の内より明けて弓始
大砲も祝にうちて御代の春
ぬるむ水ちょろりと濁す鰌かな
黒はえや田水見廻る小提灯
虫干を踏んであるくや男の子
昼顔や取つく垣も有合せ
麦秋となりけり鍛冶の台所
みじか夜や乳房放せし子の寝顔
春の雪降れふれ里の閑なうち
春雨を吸込む色よ麦ばたけ
輝を恥ぢて足袋はく踏絵かな
蚕繭しろがね色や黄金いろ
来たりけり悪魔ばらひの春の風
行こうとの気が揃はぬかさはぐ雁
又そこへ罷り出でしか蟇

行けば梅行けば柳や手ふり坂
夢にさへ見難き富士に寝る夜哉
葉の照りに馴染む色あり柿の花
撫子や藪にそだてば藪のたけ
どちらから秋は這入るぞ京の街
月近う見ゆるや山の近き里
空せまき木曽の舎りや後の月
月の入あとに露けし二つ星
出来秋や馬の歯音も今年藁
二度に来ていちどにたちぬ稲雀
末枯や木部屋の軒の昼鼠
春の日というやうな日の待たれけり
湖や氷に残る浪がしら
好もしき色や川戸の洗ひ葱
をし鳥の寝顔並べて流れけり
十六夜の闇谷々へ沈みけり
人の目にかからで朽ちし茸かな
どこへ行くこころぞ雪の暮の鶴
年の坂越すや向ふに冬の坂
用水に九分も引かれて冬の川
雨漏やぴかりぴかりと榾のもと

2　其残追善集『花の山』より

15　絵手本　山田世外に与えしもの１

15　絵手本　山田世外に与えしもの２

15　絵手本　山田世外に与えしもの３

16　絵手本　無題

19　軸「もの好曼荼羅 5」

18　軸「もの好曼荼羅 2」

17　軸「もの好曼荼羅 1」

21　軸「古畳・・・・・」

20　軸「もの好曼荼羅 6」

24　軸「芭蕉十哲図」

23　軸「芭蕉翁図」

22　軸「芭蕉翁説教図」

26　軸「赤穂浪士」

25　軸「和田嶺合戦図」

28　軸「霞けり・・・」

27　軸「四方拝・・・」

30　軸「大方は・・・」

29　軸「高砂」

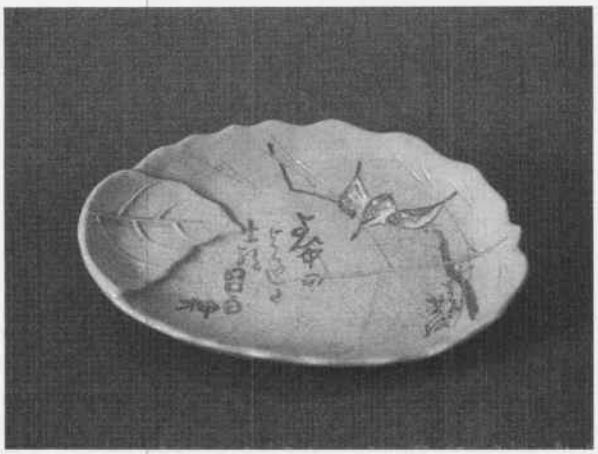
2　『花の山』表紙

31　相撲句集　長地中屋社中の判詞

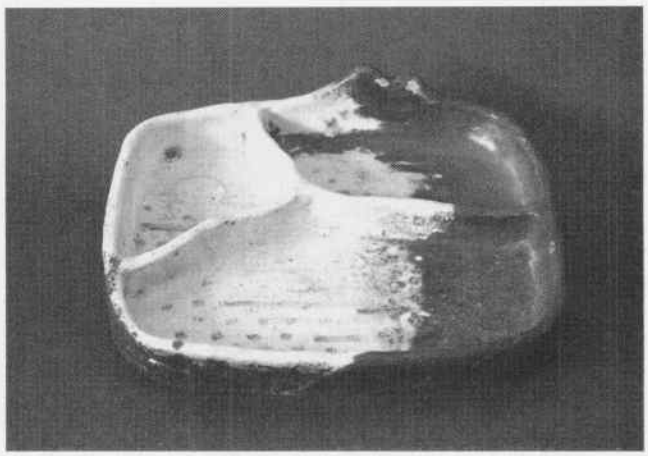
32　楽焼　茶碗

33　楽焼　湯呑・水差し

34　楽焼　香炉



35　楽焼　小皿



36　楽焼　「田毎の月」

曽良

芭蕉

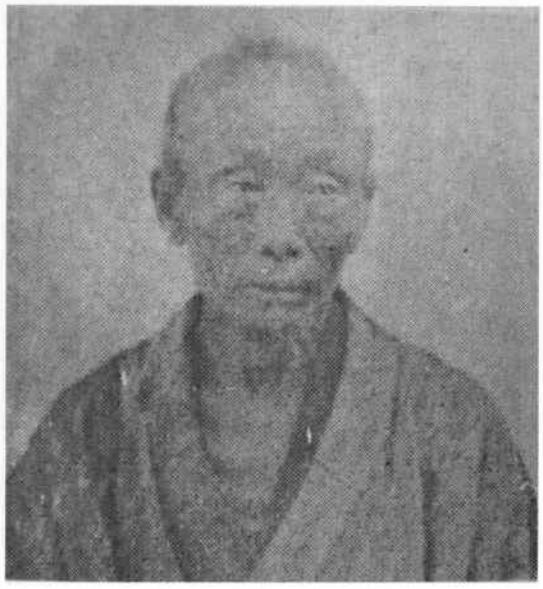
楓山

泉残

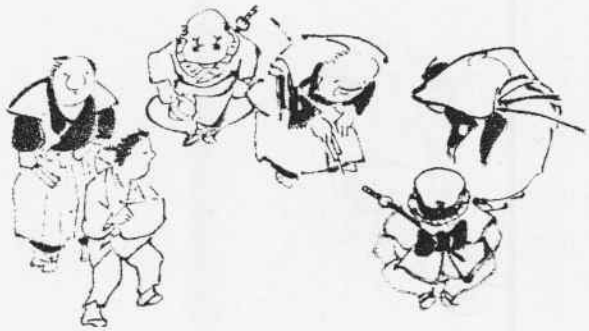
其水

37　俳人肖像画集

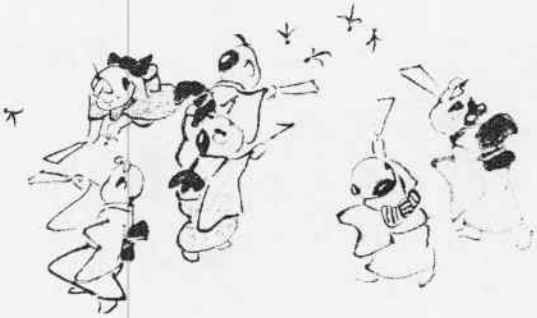
『まにまに集』より抜粋


其残肖像写真

書初め



御慶



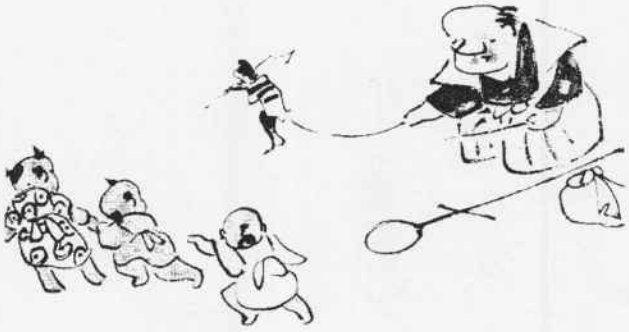
追羽根

万才

タコ揚げ

七草

カルタ

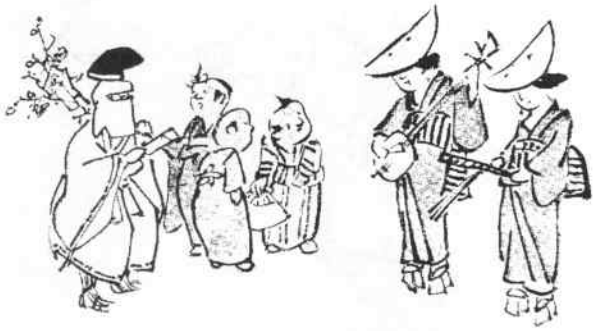


猿廻し

38　其残の俳画より 1

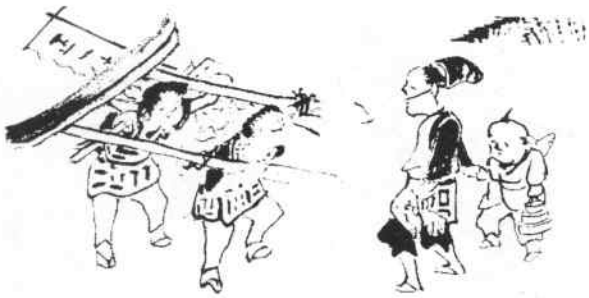
《二七》

節分

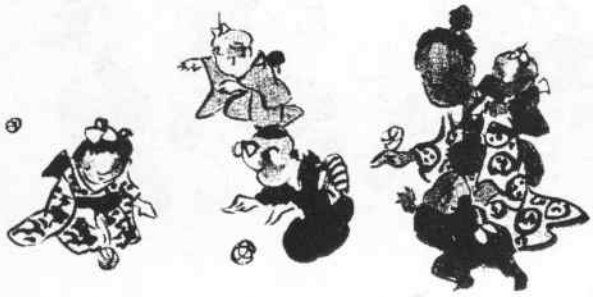


門付け

神主

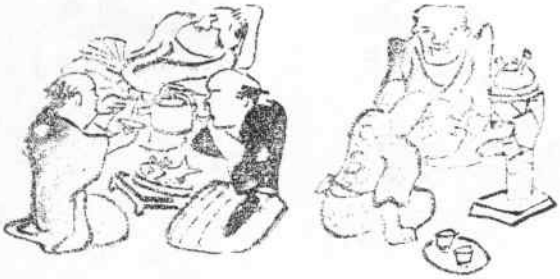


初午



おてんこ

ひな祭



ぼんござ

花見

38　其残の俳画より 2

其残妻土方雨篁の墓（地蔵寺）

岩波其残の墓（諏訪市地蔵寺）

其残句碑（地蔵寺）

其残の書いた曽良の句碑（地蔵寺）

企画展「岩波其残展」展示目録

番号	展示品	筆者・編者等	内容	備考
1	軸・全紙	岩波其残	俳画『節分』	個人蔵
2	冊子	山田敦夫編	其残追善集『花の山』	当館蔵
3	色紙	岩波其残	俳画「長生きがしたくばござれ花の山」	個人蔵
4	短冊	岩波其残	「日のめぐみならでや梅も見る我も」	当館蔵
5	短冊	岩波其残	「留すのうち守らせたまえ南瓜棚」	当館蔵
6	屏風・六曲一双	岩波其残	俳画『米作一年』	当館蔵
7	屏風・六曲半双	岩波其残	俳画・俳句『風物誌』	当館蔵
8	軸・全紙	岩波其残	俳画『職業図』	個人蔵
9	軸・全紙	岩波其残	俳画『百福図』	個人蔵
10	軸・全紙	岩波其残	俳画『安宅の関』	個人蔵
11	軸・全紙	岩波其残	俳画『農業図』	個人蔵
12	軸・半切	岩波其残	俳画『神の心』	個人蔵
13	軸・全紙	岩波其残	俳画『もの好曼荼羅』三	個人蔵
14	冊子	岩波其残	絵手本『十二ヶ月絵手本』十二葉	個人蔵
14	冊子	岩波其残	複製『十二ヶ月絵手本』	当館蔵
15	冊子	岩波其残	絵手本 山田世外に与えしもの 四七葉	個人蔵
16	冊子	岩波其残	絵手本 無題 九葉	個人蔵
17	軸・全紙	岩波其残	俳画『もの好曼荼羅』一	個人蔵
18	軸・全紙	岩波其残	俳画『もの好曼荼羅』二	個人蔵
19	軸・全紙	岩波其残	俳画『もの好曼荼羅』五	個人蔵
20	軸・全紙	岩波其残	俳画『もの好曼荼羅』六	個人蔵
21	軸・中床掛	岩波其残	俳画「古畳埃はらはん・・・・」	個人蔵
22	軸・全紙	岩波其残	俳画『芭蕉翁説教図』	個人蔵
23	軸・半切	岩波其残	俳画『芭蕉翁図』	個人蔵
24	軸・全紙	岩波其残	俳画『芭蕉十哲図』	個人蔵
25	軸・中床掛	岩波其残	絵図『和田嶺合戦図』	個人蔵
26	軸・全紙	岩波其残	俳画『赤穂浪士』	個人蔵
27	軸・全紙	岩波其残	俳画「四方拝済ませられしか」	個人蔵
28	軸・中床掛	岩波其残	俳画「霞けりいつかは斯くと・・・・」	個人蔵
29	軸・中床掛	岩波其残	俳画『高砂』	個人蔵
30	軸・中床掛	岩波其残	俳画「大方は酒に折らるる・・・」	個人蔵

番号	展示品	筆者・編者等	内容	備考
31	冊子	岩波其残注	相撲句集 長地中屋社中	当館蔵
32	楽焼	岩波其残	茶碗	個人蔵
33	楽焼	岩波其残	水差し・湯呑	個人蔵
34	楽焼	岩波其残	香炉	個人蔵
35	楽焼	岩波其残	小皿	個人蔵
36	楽焼	岩波其残	水盤『田毎の月』	個人蔵
37	冊子	岩波其残編	俳人肖像画集『まにまに集』	当館蔵
38	木版画	岩波其残・他	其残の俳画より 刷り絵 十二葉	個人蔵
	書簡	岩波其残	書簡 六葉	個人蔵